

4 年 1 組

 誰かのために わたしのために
 ～わたしのオリジナル竹とんぼ～


わたしたちはどんな総合を目指すのか

4 年 1 組では、今年度の総合をどのような学びにするか、どのような経験をしていきたいか、話し始めました。

A さんは「これまでの学びも大切にしつつ、でも新しいことに挑戦したい」とみんなに伝えました。新しいことって何だろう。今までやってきたことと同じことって何だろう、違うことって？ 4 年 1 組だからできることってなんだろう、総合でのやりたいことや考えたいことに対する子どもたちの声は尽きませんでした。どの子の声も、これまでの生活や総合（1～3 年生での経験）が中心にあり、その経験から今年の総合に向けるそれぞれの思いになっていました。

子どもたちと今年の総合を考えているうちに、まずみんなで何か一つのことに挑戦して対象の世界を味わいたくなった私がいきました。きっと、いろいろなことを経験していくうちに子どもたちとつくる総合ができあがってくるのではないかと、そう感じました。今すぐに、みんなと「何をやるか」決める必要はない。そう思って、子どもたちに一つの体験をまずやってみようという提案しました。それが「おにぎりづくり」です。

子どもたちの根底にある「何かをしたい、何かをつくりたい、何かと関わりたい」そんな想いに共通するのが「おにぎりづくり」だと感じての提案です。わたしの味を追究し「にぎる」行為の奥深さ、そして友と味をつくる喜び…クラス替えのあった 4 年 1 組の最初の活動としてはピッタリだと思いました。提案すると、大賛成。

B さんがすぐ「おにぎりを作るならピクニックに行きたい」と声をあげ、クラス全体で「じゃあおにぎりを作って、それをもって、ピクニックをしながらこれからの総合を考える一日にしよう！」と、活動が広がりました。



ふり返りには、子どもたちそれぞれのおにぎりへの発見が多く語られていました。

おにぎりを作るときに、大変なことは、気持ちをこめてちゃんと「おいしい」という気持ちでにぎることです。それができれば、おいしいおにぎりになります。（C さん）

おにぎりおいしかった！どうしてか…自分の味だから！（B さん）

なんでふつうに歩くのはイヤなのに、おにぎりをもって歩くのは楽しいのか。なんでつかれないのか。なんでおにぎりを食べたら笑顔になるのか。（A さん）

1 回しかおにぎりをにぎっていないのに、おにぎりの魅力や価値を実感している子どもたち。私の想い以上に、子どもたちはおにぎりを感じていました。そしてピクニックの経験から子どもたちの総合に対する想いがどんどん強くなっていきました。それを最も感じたのは、「わたしたちはどんな総合を目指すか」という話になった時です。



ぼくは人の役に立ちたい！誰かのためになる総合を目指した方が良いと思う。（D さん）

誰かのためになるなら「もの」を売ってみたい。きっとそれが人のためになると思う。（E さん）

何かを売って、そのお金を「誰かのため、人のために」寄付したい。それが役に立つことだと思う。（F さん）

でも自分たちも楽しめなきゃ、ダメだと思う。だから自分も誰かも楽しめる総合がいい！（G さん）

子どもたちはどんどん言葉をつないでいきました。私は子どもたちの声を受け止めることで精一杯。ただ、子どもの言葉にあった「誰かのために」と「自分たちのために」の両輪をつないだ中核を目指していった先に、3 年生までの子どもたちの経験からさらに広がりが見えてきそうな気がしました。何か困ったらその都度、子どもたちと言葉をつないで立ち止まればいい。そう思い「ものづくり」の世界を味わってみたくなりました。

自分の作り方で飛ばしてみたい

子どもたちとどんな総合を目指すか話し合いを続けた結果、「目指せ職人さん自分のため誰かのためになる〇〇づくり」という方向性が決まりました。そこで私は子どもたちに「竹」があることを紹介しました。竹から連想できるものをたくさん挙げた後、その内の中にあった「竹とんぼ」を子どもたちに渡しました。

Hさんが「先生、竹からこれ（竹とんぼ）を作ることができるの？今、作ってみたい」と、伝えに来ました。周りにいた子どもたちに広がり、竹とんぼづくりに挑戦したいという願いが確かなものになりました。4年1組の〇〇づくりが「竹とんぼづくり」としてスタートしていきました。

「先生、難しい。けずれないよ。飛ぶ未来が見えない」と、作り始めた時のHさんの言葉。けれどその時の表情は困った顔をしているのではなく、真剣なまなざしで竹板と向き合う表情のHさん。けずって、みがいて、またけずる。竹とんぼづくりは簡単にはいかないけれど、没頭できるだけの魅力を感じ始めていたのだと私は思いました。私自身、子どもたちと共に竹とんぼを作ってはみるものの、なかなか子どもも私も「飛ぶ竹とんぼ」を作れませんでした。子どもたちと同じ問いにぶつかりました。「どんな形になったら飛ぶのだろう？」と、形に目を向け始めたわたしたちでした。

そんな子どもたちに私は一つの作り方を提示しました。「この作り方で一回、作ってみよう。そうしたら何か分かるかもしれない」と提案すると、子どもたちの反応は私が想像していたものではありませんでした。

Iさんが「やだ、絶対やだ。」と言って、その言葉に続いてJさんが「なんでそれで作らなきゃいけないの？」と話しました。それはどうしてかと問い返すと、Iさんは「自分の作り方で飛ばしてみたい。答えみたいなものは最初に見たくない」と語りました。その言葉に納得していた子どもたち。その時間、誰も私が提示した作り方に頼る人はいませんでした。子どもたちが感じているその時の願いと教師の願いがズレていたのです。子どもたちは「何とかして自分の力で飛ばしてみたい」という願いが心の中にあったのです。もちろん私もその願いはありました。ただ私は、「難しい！」と言ってあきらめる子どもの姿を、みたくなかった自分がいることに気がつきました。作り方という答えを見せようとした教師の行動は、真に子どもたちの可能性を信じているとは言えない。その気づきから、子どもたちが見つめている対象の世界に教師も子どもと共にとことん見つめていこうと改めて考えさせられました。

子どもたちは自分の力で試行錯誤を重ねました。すると、少しずつ「飛ぶ」に近づいていきました。はじめは全く飛ばなかった竹とんぼが、飛びはしないけど地面の上でこまのように回る竹とんぼになったり、空中で翼が取れUFOのように滑空する竹とんぼになったりと変化が表れてきました。子どもたちが竹に向き合い、自分の竹とんぼに願いを込めて作る。作った結果、竹とんぼの飛び方として子どもたちそれぞれにかえてくる。子どもたちが対象を見つめていくからこそ、新たな問いが生まれていく。子どもたちの探求は止まりません。その探究の過程を見つめていきたい私と、子どもたちと共に竹とんぼの世界に浸り込んでいきたい私がいきました。

竹とんぼづくりに終わりはない

休み時間も、授業中も触っている竹とんぼ。失敗しても失敗しても次の竹とんぼは…と追究を諦めない子どもたち。なぜそこまで追究しているのか問いかけてみました。Kさんは「竹とんぼづくりに終わりはない。作ったら次こうしたい、作ってみたいがどんどん出てくる」と語りました。次の目標や願いが湧いてくる竹とんぼの世界。終わりが無い竹とんぼづくりを子どもたちとこれからも見つめていきたいです。

